



お疲れさま

岩本 豊子
(東京)

行き慣れし多磨墓地への道ひた走るスバル車で行く最後のドライブ

唐櫃からうとの母のお壺に添い置かれ夫の骨壺白く鎮まる

父母に会えただろうか納骨を終えて三日をぼんやり過ごす

しばらくは息子のままに父母を独り占めして過ごしたまえない

魚沼の白百合ゆるゆるほぐれゆく遺影の夫と二人の部屋に

魚沼の酒またビール、ハイボール夫の喜ぶ花よりお酒

亡き夫の位牌にむかい「しょうがない、しょうがないなあ」の聲が響けり

百日紅の花落ちし木のしろじろと夫なき庭に鳥が遊べる

電気料・水道料の通知書に我が名記され夫の名は無し

幾人の死を看取りたる我なれど夫の死に怯え狼狽えたりき

みどりごの動画を見終え病む夫は細りし脚に立ち上がりたり

われもまた癌に怯えつつ夫の元へ通いし日々は賜物にして

「お疲れさま、ご苦労さん」と夫に言い同じ言葉を自らにいう

子には子の妻には妻の別れあり子らは勤めを明るく話す

八年の介護の日々を思いつつ柚子に明るむ朝の道行く

このごろの私

長男が生まれて三週間後に夫の父宮柊二が亡くなった。その長男に男孫が生まれて4ヶ月後に夫が亡くなった。もう孫は這い始めた。孫の成長は癒しであり、また日々の活力源になっている。



入院の日々

山口 照子
(佐賀)

このごろの私
退職後、図書館のボランティアに参加している。職員から一利用者に立場が変わると、見えてくるものも変わってくる。人間関係も然り。これも人生勉強のひとつと実感しながら過ごす日々である。

良性か否か切らねば判らぬと医師は優しく言ふ淡々と

真夜中に必ず二度は起きるわれトレ付きなる個室を選びぬ

あらためてクロスワードの冊子買ふ入院中の手遊びはこれ

生来が寝つきの悪きわれなればなほ目が冴ゆる手術の前夜

仰向けのわれ一斉に覗かれぬ無影灯のランプの数多なる眼に

手術後のひと日は意識定まらず眠りとうつつの狭間往き来す

このベッドで逝きたる人もありしかと病室の壁白すぎて想ふ

点滴の雫に映る青空が指の先にも巡り来るなり

真夜中の巡回の明かり ナースらに護られてゐるといふ安堵感

患児^{かんじ}らの歓声聞こゆ病棟のクリスマスツリーに点灯されて

病室の窓から見ゆる公園のイルミネーション 聖夜は間近

救急車二台が患者を運び来ぬ紅白歌合戦ファイナーレ間際

年越しの蕎麦は即席カップ 麵当直の医師も夜勤のナースも

病院にも新しき年めぐり来て元日の昼おせちが出たり

「良性」の結果に思はず医師の手を握り慌てて非礼を詫びぬ